＜那覇市無形文化財指定＞

汀良町の獅子舞

汀良町青年部のみなさん

獅子舞は地域の五穀豊穣と悪疫払いを祈願し、沖縄全域で行われています。その型と獅子頭の特徴は各地で異なり、沖縄県下には現在約百八十の獅子頭があるといわれています。首里では現在汀良町、末吉町、真和志町で継承されていますが、三殿内や聞得大君の神事で舞い踊られたと伝わることから、汀良町獅子舞は沖縄で最も古い獅子と考えられています。

汀良町では毎年旧八月十五夜が獅子舞の日となっており、御願ぬ毛（ウガンヌモー）での拝みのあと、町内の家々を周り商売繁盛などを祈願します（町マーイ）。夜は盛大に獅子舞（シーシケーラシ）が行われます。

獅子舞の演技

獅子舞はいつごろ、どのように沖縄に伝わったのか、詳しいことはわかっていません。沖縄の大多数の獅子舞がおどけて笑いを誘ったり、派手なアクションを披露するのに対し、汀良町獅子舞の演技は士族が習った空手の原型「首里手（すいてぃー）」から発展したとされる、形式の固定した舞です。現在六種類の型が受け継がれており、二人一組のペアで一種類ずつ演技します。戦前は、演技の型は十四種類あったと伝えられています。

町マーイ前にウガンヌモーで演舞

1 大廻り
舞台を二周して回る。

2 向突出し（むこうつきだ）
あごを引き、舞台上から観客を睨みつける。「静」の演技。

3 尾喰い
尻尾を追いかけるようにグルグルと回る。

4 足打ち（あしたたき）
舞台上で上下に転がり、足を床に打ち鳴らして立ち上がる。

5 三角跳び
大廻りを一周したあと転がって跳ねる。「動」の演技。

6 まり喰い
ひもの両端に紅白の玉を結んだ「まり」を取って、遊んでいるような動きをする。

獅子頭と胴体

汀良町の獅子頭は、戦後、古写真をもとに復元された古代の獅子頭の型が受け継がれています。材質はデイゴの木で重量は五～六キロと獅子頭としては重めです。今年、うるま市の木工職人・高良輝幸さんによってリニューアルされ、機能面も強化されました。

胴体のぬいぐるみには大宜味村喜如嘉の芭蕉糸が使用されています。豪華な七色の胴体は汀良町獅子舞の特徴です。青年たちの手で染めた毛をつけ足しながら、現在の色になっています。

黒目がやや下に描かれているため
うつむくことで鋭い眼力を発揮します。

汀良町獅子舞とふれあい館

「ふれあい館」のある所は「御願ぬ毛」（ウガンヌモー）といい、昔から村の信仰を集める場所でした。平成十七年四月、旧汀良町公民館が「ふれあい館」としてリニューアルした際、青年部中村さんの意見から、獅子舞の練習で足を傷めないようクッション性のある武道場の床が取り入れられました。毎年七月から十一月が獅子舞の練習シーズンになっており、ふれあい館では夜ごと獅子舞の練習をする子どもたちや青年の声でにぎわいます。

▲汀良町自治ふれあい館

◀町マーイで厄除や商売繁盛を祈願

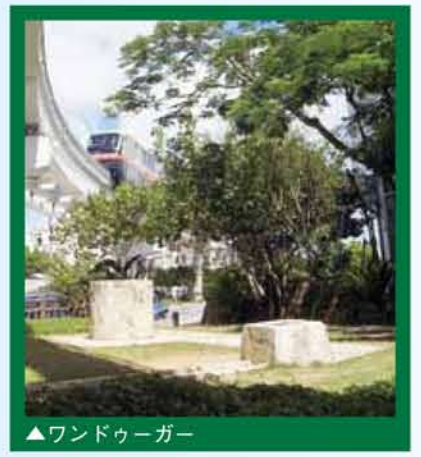
平成21年度
『汀良町十五夜獅子舞』

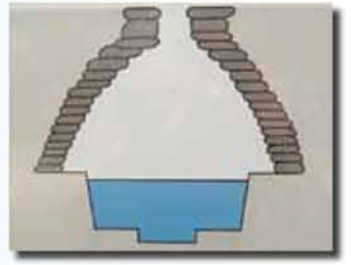
日時：10月3日（土）19:00～
場所：汀良町自治ふれあい館
※駐車場がありませんのでバス・タクシー・モノレール等をご利用ください。首里駅下車徒歩5分。出店有り、入場無料。

水のある風景
ワンドゥーガー（椀胴井戸）

観光客などの人々が行き交い、車の騒音がざわめく首里中学校側、ゆいレール高架下の一角に「ワンドゥーガー」と記した井戸を活かした小さな緑のオアシスがあります。

この井戸は、石を少しずつ突き出して積み上げ、口の方へ行くに従って狭く作られています。中はお椀を伏せたように広がっているので「椀胴（ワンドゥー）」とも言われ、井戸と水タンクを兼ねていました。この石積みの技法は、城門や橋梁などに見られるアーチ造りの技法に近い物で、先人達の水に対する想いとすぐれた石積技術を見ることができます。


▲ワンドゥーガー


▶椀胴井戸 断面図

汀良町の歴史資源

汀良町は、琉球王国時代は汀志良次村でしたが、一九一四年に行政呼称として「汀良」となりました。しかし「ティシラジ」という呼称は今でも首里の人々に大事にされています。

ウサンシチ跡

首里古地図にみえる
聞得大君御殿や
儀保殿内一帯の様子
（絵図は読谷山御殿）

●聞得大君御殿跡（チフジンウドゥン）

琉球王国の最高神女である聞得大君の邸宅跡。歴代の聞得大君は、国王の姉妹や王女、王妃などの王族が就任し、王国の重要な祭祀には、国王の長寿・王室の繁栄・五穀の豊穣・航海安全などが祈願されました。聞得大君御殿は、何回か移転を繰り返していますが、王国最後にはこの地にありました。明治中頃に売却されてからは、沖縄県師範学校の演習農場や同校の寄宿舎が建てられました。

また、首里中学校運動場西側の小高くなった一角は、「ウサンシチ跡」と呼ばれています。そこは神女たちが、中国や薩摩への航海安全を祈願し、ティサージ（手ぬぐい）を振って見送った場所といわれ、一角に石積みが残され、往時の面影を伝えています。

●儀保殿内（ジーブドゥンチ）跡

王国時代、首里は三つの行政区画に分けられ、三平等（みひら）の大あむしられ又は三殿内（みどぅんち）と総称される神女によって首里城や首里全体の祭祀が行われていました。儀保殿内は、西の平等を管轄する「儀保の大あむしられ」の屋敷であり、火神がまつられていました。

●汀志良次マチ（ティシラジマチ）跡

市が発生した時期は不明ですが、戦後の首里における商業活動の発祥の地ともいわれ、西原などから甘藷や野菜が持ち込まれて市場が形成されていました。当時は四メートルほどの道の両側に雑貨店が軒を連ね、正月や盆には非常に賑わいを見せていました。